

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第1回の骨子

■ 日 時 : 平成19年3月8日(木) 午後2時～午後4時

■ 場 所 : 札幌市教育文化会館 研修室401

■ 議事次第

- 石狩川自然再生計画について
- 「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」の設立について
- ワークショップ
 - ・ 当別地区の変遷と現状について
 - ・ ワークショップの運営・進め方について、意見交換
- 今後の予定

■ ワークショップの資料

- ・ 議事次第
- ・ 出席者名簿
- ・ 資料－1 石狩川下流自然再生計画について
- ・ 資料－2 「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」の設立について
- ・ 資料－2 別添 「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」設立趣意
- ・ 資料－3 当別地区の変遷と現状について
- ・ 資料－4 ワークショップの進め方フロー(案)

■ ワークショップ骨子

● 石狩川自然再生計画について

石狩川自然再生計画について、事務局より説明があった。

委員の主な意見は以下の通りであった。

- ・ 課題にあげられている「チョウザメ」は複数種いるので、種を明確にしておく必要がある。
- ・ 植生の再生目標については、イメージでは水際まで抽水植物で示されているが、実際には水際は樹林で後背地が抽水植物という場合が多いので、石狩川でどうであったのかを整理しておいた方がよい。
- ・ 種の情報だけでは各種がどのような状況(安定して生息しているのか、減少傾向にあるのかなど)かわからない。その辺を把握する必要がある。

● 「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」の設立について

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」の設立について、事務局より設立趣意書および規約(案)の説明があった。

協議の結果は以下の通りであった。

- ・ 「座長」は北海道環境財団の辻井委員とする。
- ・ 規約は「入会方法」を書き加えることで承認された。

● ワークショップ

「当別地区の変遷と現状について」と、「ワークショップの運営・進め方について」事務局より説明があった。意見交換の結果は以下の通りであった。

ワークショップの進め方について

- ・ 当別地区は、釧路川や美々川の自然再生とはターゲットが異なると考えられる。ロンドンのテムズ川の下流では湿地の自然再生をやっているが、当別地区は規模や近くに都市があるところなど状況が似ているので参考になるのではないかな。また、将来的にはラムサール登録湿地になるぐらいまで考えてもいいのではないかな。最近では自然だけではなく文化やダム湖のような人工的な要素も含めて考えられるので、明るく面白いものを作るという考え方でワークショップを進めて行きたい。
- ・ 人々が利用することを考えれば、パークデザイン関係の委員がいても良いのではないかな。
- ・ 行政の担当者は道路、河川などと分かれて意見を求めに来るが、場所を見るとほとんど同じこともある。道路の担当者なども事務局に加えると良いのではないかな。
 - ワークショップの中での対応というよりも、行政内で情報を共有しながら連携を図りたい。（事務局）
- ・ 生物種の情報については種数だけでなくデータの信頼性を保つため生のデータを見せて欲しい。
 - 現有するデータだけでなく、引き続き情報収集に努めたい。また、ワークショップ参加者からの情報に基づいた調査なども実施したい。（事務局）
 - 本ワークショップにおいては、計画を考える上で必要と思われる情報は事務局へ依頼するだけでなく各委員が持ち寄る方法をお願いしたい。
- ・ 人間活動と自然環境のバランスを取らねばならず、そのバランス感覚は時代によって変わることがある。最近は環境の方が重視されるような形になってきたことが、この事業の主旨となっている。そういうネットワーク化の中での最初の一段階として、当別の今回のワークショップが位置づけられると考えている。
- ・ 日本生態学会による「自然再生事業指針」が良い参考資料なので、メンバー、関係各位読んでおいてほしい。

当別地区の自然再生に向けて

- ・ 当別地区の再生は石狩川全体における拠点整備・ネットワーク化のスケジュールの中でどのような位置づけになるのか？
 - 流域全体を意識しながら、まずは当別地区から始めたい。（事務局）
- ・ この地区の自然再生を考える上で、周辺のどのくらいの範囲までを含めて考えれば良いのか？
 - 石狩川全体、少なくとも中下流域を含めた中での当別地区に必要なものを考えて良いと思う。
- ・ 旧版地図の過去の林はヤナギだろうかヤチダモだろうか。この辺一帯はヤチダモかハルニレで

はなかったか？今後調べて欲しい。

- ・ 外来植物について現状を調べておく必要がある。また、今後どうなるかを考え、現在いる動植物（例：草原性鳥類）に配慮するのか、そもそもあるべき自然に焦点を絞るのかなどを整理していく必要がある。
 - 草原性鳥類の生息状況はかなり際どい状態にあるため、あらゆる手段を執って取りあえず現状で繁殖させてやらなければならない状態にある。現実問題として草原性鳥類は現存する外来種群落がなければ生存できない。したがって、全部在来種にしなければならないということにはならないということを認識してほしい。
 - 「外来種」そのものが問題という観点と動物による利用環境として必要という観点で相反するこのような課題については、石狩川下流全体での取り扱いとは別に、当別の地区でどのように具体化するかという位置づけで取り扱う必要がある。
- ・ カワヤツメとの関連で、当別川の縦断勾配の過去からの変化を昭和 51 年くらいからでも良いので知りたい。非常に河床が低下しているようであり、その起因に判断がつけばここでの湿地造成に役立つ情報となる。
- ・ 将来的に計画地は鳥獣保護区（禁猟区）に指定されるのか？
 - 自然再生した場所でラムサール登録されているところでは狩猟ということは世界的にみてもありえない。
 - 道庁に指定を提案することは可能である。（事務局）
- ・ 美登位ワンドは写真でみるときれいだいが、実際は土砂や枝、ゴミなどがたまっている。例示する場合には注意して欲しい。
- ・ 都市部に近くしかもまとまった面積があることから、ここをいろんな方が訪れ、そういうことも地元は期待しているはずなので、そういうところに対する配慮をしてほしい。
- ・ 今は閉鎖的な水面になっているが、石狩川全体の自然再生との絡みでは、川との繋がり（本流でなくても当別川でもよいと思うが）を頭に置いた計画になっていくと良い気がする。
- ・ ここが良くなるとおそらくここから周辺の農地にいろいろ生物が移動して、そこでまた再生産をするということが当然考えられる。そういう広がりが出るような計画になってくると素晴らしいと思う。

● 今後の予定

今後の予定について、事務局より平成 19 年 7 月頃の開催予定（現地見学込み）であることの説明があった。

- ・ 次回は自然再生に関するアイディアを自由な形（図面、文章等）で各委員が持ち寄ること。

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第2回の骨子

平成19年8月3日（金）、委員13名の参加の下で当別地区自然再生ワークショップが開催されました。ワークショップの開催に先立って、参加委員で対象地の現地視察を行い、状況を把握した上で、現地に近い西当別コミュニティセンターを会場に、活発な意見交換が行われました。

■ 日 時 : 平成19年8月3日（金） 午後1時～午後3時30分

■ 場 所 : 西当別コミュニティセンター

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 出席者名簿
- ・ 第2回石狩川下流当別地区自然ワークショップ資料

■ 議事の内容

- 新規入会者審議
 - ・ 新規の入会希望者の届出について事務局より説明があり、ワークショップ委員の承認により、入会が決定しました。
新規入会者 竹中 踐 氏
- 各委員からの提案
 - ・ 当別地区の自然再生について、各委員から提案の発表がありました。
- 関連情報の紹介
 - ・ 行政の参加委員から当別地区の自然再生を検討するにあたっての関連情報の紹介がありました。
- 整備の方向性についての議論
 - ・ 発表内容や情報提供を踏まえて、委員相互に整備の方向性について議論を行いました。

項目	ワークショップにおける意見
自然再生の考え方について	・ かつての環境は洪水氾濫などでリセットされながら遷移していたが、現在では自然の力でリセットされない状況にあると言える ・ 人間がいない世界であれば、自然の力による環境の更新を行うことが出来るが、それが出来ないため今の状態をある程度活かしたいというところに自然再生の考え方があるのではないか ・ 環境の多様性を維持してきた原動力は、従来は水の力と考えられるが、そういう力がなくなった現在では、ある程度人が手助けして環境をリセットする必要がある ・ 公園的なものなのか？自然に任せるのかについて議論をすべきではないか
環境の維持について	・ 環境を人為的に維持していくということ考えるのか、出来るだけ手をつけないようにしていくのかを考えることが必要ではないか ・ 誰がどんな管理をするのかということを考えながら、管理がうまく循環していくように仕組みを考えることが必要 ・ 維持管理がしやすいことに留意して計画することが必要 ・ 目標を設定して、維持すべき状態をはっきり出した方が良い
整備の考え方について	・ 治水の条件に柔軟性を持った考え方もあるのではないか ・ 生態系ピラミッドの視点で、必要な環境を考えていくことが必要

項目	ワークショップにおける意見
人の利用について	・ 人の立入があると繁殖に影響が出るため出来るだけ人の立入は控える場所にしたい ・ もし人を呼ぶのであれば、現在の石狩川公園を整備するに留めて、対象地ではどのように自然を再生すべきかだけを考えたい ・ 幅広い方々に対して気軽に自然に触れることのできる場や環境学習が出来るような場にしたい ・ 自然の場所を求めて遊ぶ家族が多く見られるので、そういう人たちが来て、石狩川的环境というのは素晴らしいということが観察出来るような場所としてはどうか ・ 堤防植生を山野草などにすれば管理に地元参加が得られるのではないかと ・ 時期を選べば、ヨシ刈りは出来る、ヤナギの炭焼も出来るのではないかと ・ 水芭蕉の創出や、漁業との関係についても今後検討したほうが良い
植生について	・ 対象地は面積があり、様々な環境を十分組み込めるスペースがある ・ 現在樹林はヤナギが主体であり、保全すべき樹林はなく、石狩川にかつてあったハルニシ・ヤチダモのような樹林を再生すべき ・ 治水上の条件を考えた上で、樹林の配置を考えてはどうか ・ 絶滅危惧種の視点では草地性の鳥類が多く、草地の優先度が高い ・ 多様性のある草原を維持していく手立てが必要になるのではないかと ・ 堤防の法面も自然再生の対象に組み込んでどうか ・ 草地環境としては、自然に任せておけば良い ・ 草原にしておくことで害虫についての問題を生じる恐れがあるので留意が必要
水域・水辺について	・ 湖畔の勾配を緩やかにし、いろんな水位条件の違いを形成してはどうか ・ 湖沼を全てつなげる際には、水面の維持という面で心配がある ・ エゾアカガエルの繁殖地の整備を考えたい ・ 対象地ではシギ・チドリのための環境として、砂州等の整備が重要である ・ 干潟を5年程度で人為的にリセットすることが鳥にとっては有効 ・ 石狩川の河岸にワンドの整備が必要 ・ 高水敷の土砂堆積も考慮していかなければならない ・ 河道の安全上問題がないのであれば、河道を蛇行させて自然に変わっていく姿を長年に亘って見てみてはどうか ・ ある程度の河道の蛇行は良いが、河道を蛇行させるのではなく、川を広げて蛇行を許容するという形で考えてはどうか

こうした議論を踏まえて、次回のワークショップまでに以下のような進め方をすることが決まりました。

今後の予定	・ 今回の意見を踏まえて事務局が対象地の自然再生計画図（案）を作成する ・ 作成した計画図（案）を委員・アドバイザーに提示し、意見をヒアリング ・ ヒアリングの結果を考慮して計画図（案）を修正する ・ 修正した計画図（案）を基に次回のワークショップで議論を行う
-------	---

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第3回の骨子

平成19年10月5日（金）、委員12名、アドバイザー3名の計15名参加の下で第3回当別地区自然再生ワークショップが開催されました。

■ 日 時 : 平成19年10月5日（金） 午後2時～午後4時

■ 場 所 : KKRホテル札幌

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 規約
- ・ 第3回石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ資料

■ 議事の内容

- 目標の設定
 - ・ 対象地の広域的な位置づけ、事業の必要性、基本方針（案）、環境整備の方向性について部分的な修正、追加、確認を行うことでまとまりました。
- ゾーニング計画
 - ・ 現況をふまえたゾーニング計画を作成しました。
- 整備計画
 - ・ 整備計画図案について議論し、湖沼湿地の形成、河畔林の形成、当別川河岸と石狩川河岸の多様化について計画図を作成しました。
- 今後の予定
 - ・ 今後の予定として、第4回では順応的管理、維持管理、利活用について議論をします。

項目	意見
目標の設定	● 広域的な位置づけに自然堤防上の樹林環境の減少についても留意点として入れるべき（修正事項とした） ● チョウザメ、イトウなどについては上位計画の精神をくむべきで、「念頭に」という曖昧な見方ではなく、明確な方向性として示すべき（検討事項とした） ● 代表種にオオワシ、オジロワシが入っているが、指標種にも入れた方がよい。石狩川の冬期の限られた環境の中で、人為に頼らず越冬していることを考慮した方がよい（目標設定の考え方、冬季の利用等の調査等を後日の確認事項とした） ● 水辺草むらの鳥としてクイナ以外の鳥も必要である。どのような種が良いかはすぐに答えられないが例えばバン、ヒクイナ、ヨシゴイの仲間などと思われる（種構成などを後日の確認事項とした） ● 生物指標でフィードバックする考えならば種を絞り込む必要がある ● 目標に生物の基盤となる植物種を入れておいたほうが良い ● 生態ピラミッドのどの部分の種を抽出しているかという観点も必要と考えられる ● 植物は表徴種・随伴種として、動物との関わりも考慮して整理すべき ● 植物を指標にするかどうか明確にすべき ● どのような群落になるか植物の変化を想定できる資料を整理すべき（植物について目標を検討の上、追加する方針とした） ● 草原性鳥類はホオアカではなく、ヒバリを入れる ● 対象地の位置づけの「森林性」鳥類は森をつくるものと誤解されそうなので「河畔林性」とする方がよいのではないかと。また、同様な意味で目標の設定における「樹林の形成」も「河畔林の形成」とした方がよい（前者は一般的な意味なので変更しない。後者は変更する）
ゾーニング計画	● 小川が表示されておらず樹林のあるところが湿地保全ゾーンになっているため、イメージが合っていないように見える ● ゾーニングの必然性を明確にする必要がある ● ゾーニングする際に現状の遷移状況を明らかにすべき ● 自然のことなので区切りを明確にしづらく、ゾーニングしにくいと思われる。変化をみていくことで良いのではないかと（事務局の現況説明により合意を得た）

整備計画	河畔林の形成 ● 河畔林が形成するために、自然堤防のようなわずかに高い箇所があるか。また、湿地には湿地林が形成するのではないか ● 現在の高水敷で十分に高いと考えられる (河畔林の形成は合意) 湖沼について ● 雨水だけで水面が維持できるかどうか難しいと思われる (維持管理に関するものとして次回に検討) ワンドについて ● 石狩川の河岸の多様化として、石狩川と連結する高水敷上の湿地ができないのであれば、ワンドの形成を図る必要がある ● ワンドの留意点に土砂の他にゴミの話を入れるべき (維持管理に関するものとして次回に検討) ● ワンドは変化する環境であり、初めから変化するものとして考えるべき (開放型ワンドの形成を図ることで合意) 河道拡幅について ● 石狩川にかつて砂州環境が多くあったかどうかは疑問である。当別川の試行的な拡幅は、様子を見ることでよいと思う。但し、河岸の掘削方法に際しては、波浪による河岸浸食の状況も考慮し漁協等へも配慮が必要と考えられる。 ● 鳥類が水際で採餌等を行うことを考慮すれば中水敷状の冠水しやすい湿地をつくるのが望ましい (砂州の形成ではなく、中水敷状の地形として切り下げることで合意)
------	---

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第4回の骨子

平成20年2月7日（木）、委員14名、アドバイザー3名の計17名参加の下で第4回当別地区自然再生ワークショップが開催されました。

■ 日 時 : 平成20年2月7日（木） 午後1時～午後3時

■ 場 所 : 寒地土木研究所 講堂

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 設立趣意書、規約
- ・ 第3回石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ（意見骨子）
- ・ 第4回石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ説明資料
- ・ 石狩川下流当別地区自然再生実施計画書(素案)

■ 議事の内容

石狩川下流当別地区自然再生実施計画書(素案)を基に、様々な意見交換が行われました。

- 目標の設定
 - ・ 第3回ワークショップで議論された目標についての修正事項の確認を行いました。
- 整備計画
 - ・ 第3回ワークショップで議論された整備計画の内容について、委員から意見があり、それについての議論を行いました。
- 順応的管理・推進体制
 - ・ 変化への対応、維持管理、利活用、地域連携といった項目に関わる意見が出され、実施計画書(素案)への追加項目や修正項目が提案されました。
- 今後の予定
 - ・ 今後の予定として、第5回では石狩川下流当別地区自然再生実施計画書の取りまとめを行います。

項目	意見
目標の設定	・ 目標種に多様性、将来の目標といった点から、ヒバリ、シマアオジを加えたほうがよい (修正事項とした) ・ 目標となる植生を追加するべきであり、植物単体では評価できないので、陸生・湿性・水生等の環境ごとに群落名称で書き加えたほうが良い(たとえばハンノキ-ヨシ群落など) (修正事項とした)
整備計画	○ 樹林環境 ・ 絶滅危惧種のチュウヒがいるため当別川の左岸は自然保護を主体としたゾーンとし、右岸の方で樹林育成といった考え方もあるのではないか ・ 本来の河畔林が少なく、種子供給が望めない状況であることから、それを補うという考え方で苗を入れていくことも自然再生の一環ではないか ・ 長期的な視点でチョウザメ・イトウ・タンチョウ・シマフクロウへの対応として、樹林環境の形成を進めてはどうか ・ 上位計画にあるタンチョウ・シマフクロウも重要だが、現時点でもう絶滅する恐れのある種の保全を考えたい ・ 樹林の形成に関しては、チュウヒの生育状況を確認しながら、問題が生じた時点で伐採などの管理を行うということを提案する (樹林の順応的管理手法を記載する) ○ 河岸環境 ・ 多様な河岸環境ということも含めて、石狩川の上流側の河岸の保全の仕方をもう少し考えた方がよいのではないか (現況河岸の保全、順応的管理手法を記載する)

順応的管理について	○変化への対応 - 石狩川は時代と共に変化し、携わる人も変わることから、時代の変化への対応も考えていく必要がある - 順応的管理というのは時代の変化に対応し、状況が変わっていったら途中で修正しなければならない (時代の変化についての対応を記載する) ○維持管理 - 地面の攪乱は、両生類の成育の点からは、なるべくしない方が良い - 草原や砂礫地の河原といった環境が減少しており、その維持や保全が重要だが、人間が手を加える形で維持していくのか、遷移に任せるのかを整理する必要があるのではないか - 絶対手を加えないのではなく、環境が継続できるような形のコントロールシステムがあっても良いのではないか - 攪乱に依存する生態系への配慮が必要であり、失われた自然の力による攪乱を当面は人間が肩代わりすることも必要ではないか - ヤナギの管理を行い、草原の維持を図ってはどうか - すぐに手を入れるのではなく、生態系の移り変わる時間もと与えて状況を見ながら、ある程度放置して様子を見る考え方もあるのではないか (維持管理の考え方を整理する) - ヤナギやヨシの利用のシステムがあれば環境維持に繋がるのではないか - ヨシをビニールハウスの保温に使うことや伐採したヤナギをウッドペレットとして使うことなど、維持管理を利用につなげることを模索してはどうか (維持管理を継続するために必要な考え方を記載する)
推進体制	○利活用について - ここならではの環境教育というものを発信したい - 利活用の目的のところに自然と共生する地域社会の形成を目指すということが書いてあるが、これを計画全体の目標にしてはどうか (計画全体の目標への記載項目を追加する) ○地域連携について - この事業を通して地域に調査の出来る人たちが出てくるということが一番大事なことでないか - 周辺の住民が調査の技術を身につけることが、自分たちで自然を守っていくことにつながるのではないか - 当別地区の自然再生のコンセプトは協働だと考えられる - 自然再生についての発信も必要であり、活動成果を発信するような手立てがあると良い (意見内容を計画書へ取りまとめる)

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第5回の骨子

平成 20 年 3 月 12 日（水）、委員 12 名、アドバイザー 1 名の計 13 名参加の下で第 5 回当別地区自然再生ワークショップが開催されました。

■ 日 時 : 平成 20 年 3 月 12 日（水） 午後 1 時 30 分～午後 3 時

■ 場 所 : 北海道環境財団 環境サポートセンター 多目的ホール

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 第 5 回石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ 説明資料
- ・ 石狩川下流当別地区自然再生実施計画書(案)
- ・ 石狩川下流当別地区自然再生事業 平成 20 年度の基盤形成の予定について

■ 議事の内容

石狩川下流当別地区自然再生実施計画書(案)を基に、意見交換を行い計画書が取りまとめられました。

○ 実施計画書(案)について

- ・ 第 4 回ワークショップ及びこれまでに出了された意見について総合討議を行い、実施計画書を取りまとめました。

○ 次年度の活動について

- ・ 次年度からの活動にあたって、意見交換が行われました。

○ 平成 20 年度の基盤形成の予定について

- ・ 基盤形成に関わる工事の実施予定について説明がありました。

項目	意見
実施計画書(案)について	○生物ピラミッドについて ● 食物連鎖の位置づけは季節によっても変わるので、一例として取り扱ったほうがよい ● 記載している種類は、あくまでも目標種の整理結果として考えた方がよい (目標種の記載であるという注意書きを加えた) ○用語について ● 計画書案の見試しという言葉はなじみが薄く、順応的管理という言葉が認知されてきているので、見試しと同義であれば、順応的管理という言葉を使ってはどうか (見試しの説明に順応的管理という表現を書き加えた) ● 計画書案の『繁殖調査』という言葉は『なわばり調査』という表現の方が適切ではないか (なわばり調査に変更することで確認した) ○計画図について ● 貴重種の生息に配慮してもらえるよう、工事などのやり方に知恵を出したい ● 樹林の生育には時間がかかり条件も厳しいと考えられることから、計画図の樹林の絵をパース図程度に修正し、イメージの統一を図ってはどうか (計画基本図を修正し、内容の確認を行った) ○キャッチフレーズについて ● キャッチフレーズは読み易さや印象に残ることを考えて、短いものの方がよいのではないか ● アイヌ語表記は促音の表現が難しいが、より発音に近いトゥ・ペツとしてはどうか (水と生きものの郷 トゥ・ペツとすることで確認した)

項目	意見
次年度の活動について	● 利活用の段階で目標と活動をうまく馴染ませるような取り組み方が必要である ● 具体的な行動を踏まえ、利活用や環境教育の目的を確実に実行するためのプロジェクトチームを立ち上げて、方針などをまとめていってはどうか ● 自然再生事業に関わる工事状況も見学できればよいのではないか ● 子供たちが自分で手を加えてどうなるか試験する箇所をつくると良いのではないか ● 子どもの利用を考えると、安全面から禁猟を早期に実施した方がよいと思われる ● 関わっている団体同士の連携を密に取り、行動予定・内容を周知することが重要と考えられる ● 活動のカレンダーを作り、それに基づいて更に細かい注意しなければならない情報などの立ち入りに関する警告の仕組みが必要 ● 現地へのアクセス手段の案として、バス停を設置などは検討可能である
基盤形成の予定について	● 基盤形成は平成 20 年度に当別川の右岸から実施したい ● 工事に際してはワークショップの委員の方々に配慮すべき点についてアドバイスをお願いしたい ● 工事や運搬の際の埃の舞い上がりなどには十分な配慮をお願いしたい

- 第5回ワークショップで「石狩川下流当別地区自然再生実施計画書(案)」の内容について討議され、計画書が策定されました。
- 辻井座長には計画書の策定について署名をいただきました。
- ワークショップ終了後、委員の皆さんからワークショップ参加の感想などを書いていただきました。
- 頂いた感想や署名については、計画書に添付させていただきます。

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第6回の骨子

平成 20 年 5 月 22 日（木）、委員 10 名、アドバイザー 1 名の計 11 名参加の下で第 6 回当別地区自然再生ワークショップが開催されました。

■ 日 時 : 平成 20 年 5 月 22 日（木） 午後 1 時～午後 3 時

■ 場 所 : ふれあい倉庫 当別 赤れんが 6 号

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 第 6 回石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ 資料
- ・ 地域連携計画(素案)

■ 議事の内容

石狩川下流当別地区の自然再生を地域連携で進めるための、意見交換が行われました。

- 今年度の進め方について
 - ・ 平成 20 年度のワークショップの進め方について確認しました。
- 地域連携の内容について
 - ・ 地域連携を進めるための、意見交換が行われました。
- 役割分担について
 - ・ 今年度の活動にむけた、意見交換が行われました。

項目	意見
地域連携項目について	・ ホームページの形を作って、それぞれのホームページからリンクするとよい。 ・ 自然観察会の実施はまだ具体的には決まっていないが、やっていきたい。 ・ モニタリングはトンボを中心に、すでに 5、6 回現地を調べて、コース取りを決めている。 ・ 今年度のなるべく早い段階から種集めをスタートさせなければならない。 ・ 種はそれぞれ種類によるので、3 回くらいに分けて周辺から採取する。 ・ 苗づくりは、植える場所に近いところ、環境に近いところがいい。 ・ 苗の管理をどうするかを検討して詰めなければならない。 ・ 苗づくりは子供たちの参加が望ましい。場所のことも考えると学校が良いのではないか。観察会と種採りをうまくドッキングしたい。 ・ 水面を植物または水面を利用するいろんな生物含めて経年的に調査していくことは可能。毎年移り変わっていく様子を生態的に環境学習として教えられれば良い。 ・ 周辺で地引網を年に 2 回やっているという話があり自然観察会には極めて良いチャンスだと思う。 ・ エゾアカガエルに関しては毎年繁殖状況の調査をする。カエル探偵団という全国的にカエルの情報発信しているところがあるので、そこに情報を挙げていきたい。 ・ エゾアカガエルについては誰でも調査が出来る簡単なマニュアルを作る取り組みをしている。 ・ 希少鳥類の繁殖・飛来状況、保全状況を押さえていこうとしている。 ・ チュウヒは思っていたよりも広い範囲を利用している。ヤチネズミなどの餌が非常に豊富だからだと思う。最低どれくらいの草原が必要かというようなことは少し目途を付けておいた方が良くと思う。 ・ 草刈りなどの管理で連携を取りながらやっていけたら良いと思う。 ・ 工事を通じてどのように変わってきたかということをまとめていきたい。 ・ 草刈り等の管理への協力も、日常的に進めたいと思うが、計画地に訪れる他の人に対して維持管理で草刈りをしていることをわかるようにしたほうがよい。

項目	意見
地域連携項目について	・地元の人たちにどんなことをやっているのかを知っていただくような活動を住民協議会の方でやっていただければと思う。 ・環境美化は、地域の住民や子供たちを集めるというような協力をしたい。 ・広く知っていただくという意味では当別町、江別市、札幌市にお願いすることもあると思う。現在あそこで何をやっているかというのを見ていただくことも必要と思う。全体の管理の仕方やモニタリングも含めて、トータルとしてマネジメントしていくためのシステムをどうやって作っておくのかを考えておく必要がある。 ・地域に説明するような機会に積極的に関わらせていただきたい。環境の情報を事務局で共有して発信できれば良いと思う。
拠点整備について	・トイレや駐車場もないということで、活動をやりにくい場であり、トイレなどの拠点整備が必要と思う。 ・トイレの設置は今の段階では難しい。 ・トイレがないという覚悟で行くというような姿勢というのは必要だと思う。自然再生事業なので公園にする必要はないと思う。 ・公園利用するような形でここを利用するというのは、折角来た鳥たちだとか、他の生き物に対して非常に迷惑な話であって、本当はそっとしてやりたい。 ・ホームページなどでここに行けばこういう花が見ることができるし、こういう鳥もいるよという情報で人が集まってくる可能性もある。 ・興味のない人にも来てもらうためには情報提供が必要だが、貴重種の問題もあるので、どこまで情報を出すかが常に悩ましい。 ・自然を大事にしつつ、多くの方々にふれ合ってもらいたいと思っている。
情報提供について	・当別町が一番関わり大きいところだから、広報に載せていただくと良いのではないかな。 ・一度広報で計画を周知しており、節目で周知していきたい。 ・西当別地区の懇談会の時にも、計画の内容を説明している。 ・「北海道野鳥だより」で紹介できる。今なら9月の会報に間に合う。
自然観察会について	・自然が自然と再生し続けている場を使って子供達をはじめ多くの人に自然とはこういうふうに再生していく、あるいはそれに対して自然再生事業というのはどういうことをやっていくのかということを含めて観察会を実施できたら良いのではないかな。 ・7月の前半に予定している鳥の観察会とドッキングさせて、第1回観察会みたいなことができないか。
苗木作りについて	・種採りの前に、苗を育てる場所や協力先の検討が必要である。 ・当別町だけでなく札幌市や江別市を含め、学校への協力依頼が必要である。 ・今年は学校がスケジュール的に難しければ、民間への協力依頼を考えてはどうか。
堤防除草について	・当別川左岸の堤外側の除草は、産卵期、草原性の鳥の産卵期を避けて、7月の下旬から8月の下旬にかけてやっている。 ・堤防管理上の問題として草刈りは、本来であれば年に2回も3回も刈ったほうが安全上は好ましい。

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第7回の骨子

平成20年9月30日（火）、委員11名参加の下で第7回当別地区自然再生ワークショップが開催されました。

■ 日 時 : 平成20年9月30日（火） 午後1時30分～午後3時

■ 場 所 : ホテル札幌ガーデンパレス 4階 平安

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ 第7回資料
- ・ 北海道野鳥だより(第153号抜粋)
- ・ 新聞記事(種採り)

■ 議事の内容

石狩川下流当別地区の自然再生を地域連携で進めるための、意見交換が行われました。

○ 地域連携の実施状況について

- ・ 自然観察会(川遊び、水生生物観察)、植樹の種取、鳥類観察会について報告があり、課題等について意見交換しました。

○ モニタリングの状況について

- ・ 鳥類、魚類、エゾアカガエル、トンボ類、植生等のモニタリング結果について報告が行われ意見交換しました。

○ 自然再生事業の取り組み状況について

- ・ 19年度に造成した池の経過状況報告及び20年度に実施予定の計画地の変更等について提案し意見交換しました。

○ 地域連携の計画について

- ・ 今後の方向性について意見交換しました。

○ その他

- ・ 情報提供の際の事業説明資料案について意見交換しました。
- ・ 銃猟規制について情報提供と意見交換が行われました。

項目	意見
地域連携の実施状況について 【自然観察会】 【自然再生植樹種採り】 【鳥類観察会】	・ 川流れというのは子どもにはずいぶん喜ばれる。 ・ 子どもの視点でのモニタリング調査や、地域の小学校などとの共同で活動を地域に根付かせて行ければいい。 ・ 反省点として、保護者の方からは服が泥だらけになり使えなくなったという話があったので、事前の周知を十分に行うことが必要と思われる。 ・ 種採りは時期的にエゾニワトコとヤマグワを採取した。 ・ 当別地区に現在ある在来の木本類は、エゾニワトコ、ヤマグワ、若干のオニグルミ、ヤチダモ程度しかないので、その他の樹種については茨戸川など、当別地区の周辺で採取する予定である。 ・ 雨天の中の観察会となったが、早朝の観察時間であったことや、雨が降ることで飛ぶのを逡巡していたような鳥が観察できた。 ・ シギやチドリの占める割合が高かったのが、当別地区の特徴を表していると思われる。

モニタリングの状況について 【鳥類】 【両生爬虫類】 【トンボ類】	・池の水位が下がっており、シギ・チドリ類、水鳥に関しては個体数的には少し少なめである。 ・生物が居てほしいと思うところと、生き物が選んで集中的にいる場所とは違いそうなので、モニタリングで細かく見ていく必要がある。 ・特定外来種のセイヨウマルハナバチが確認された。 ・エゾアカガエルについては、人工的な水たまりでも卵塊の付着に適した場所であれば、繁殖可能ということがわかった。 ・初期段階であるため、今のところは単純なトンボ相となっているが、トンボは飛翔力があるので当別地区の周りから入ってくると思う。 ・生物種の確認リストに外来種と明示することで他の分野の人にも分かり易い資料となるのではないか。 ・プロジェクトが始まる前の生物相がどのようなものであったか、基本的な植物、動物、昆虫等の標本を作製して保管しておく、今後の資料になるのではないか。
自然再生事業の取り組み状況について	・石狩川公園の隣接部に計画されている植生基盤盛土について、山形に高くすることで頂上から計画地全体が見渡せるようにしてはどうか。 ・河岸部に護岸のようなものを張り付けていくのか、なにもしないのか。 ・大きく浸食受けるような状況ではないと思われるので(堅いコンクリート製の)護岸は考えていない。
地域連携の計画について	・地域連携についてはボランティアを前提にしているが、全部がボランティアでやるのか、経費をどう考えるかという議論をしておいた方がいいと思う。 ・今年度の観察会は予備調査的な位置づけであったため、大きく周知しなかったが、今後は広く呼びかけて行きたい。
事業説明資料について	・情報提供の際に使用する配布用と展示用の説明資料案を作成したので、デザインや掲載内容について、ご意見をいただきたいと考えている。
銃猟規制について	・銃猟規制については、法規制に関して種々条件があり実情はハードルが高い。今後、法指定に向けて調整を図りたい。 ・銃猟規制という方向はワークショップとしては最も望ましいと思っているので種々の条件をクリアして行かなければならないと考えている。 ・宮島沼で銃猟規制が行われるまでに 10 年以上かかっており、一生懸命モニタリングを行い、多様な環境であることや、希少な猛禽類などが生息していることをアピールしていくしかないのではないか。

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第8回の骨子

平成21年3月2日（月）、委員12名、アドバイザー3名参加の下で第8回当別地区自然再生ワークショップが開催されました。

■ 日 時：平成21年3月2日（月） 午前10時00分～午後12時00分

■ 場 所：ホテル札幌ガーデンパレス 4階 平安

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ 第8回資料
- ・ 石狩川下流当別地区自然再生説明資料 A3（英語版）

■ 議事の内容

石狩川下流当別地区の自然再生を地域連携で進めるための、意見交換が行われました。

○ モニタリングの状況について

- ・ 地域連携で進めた今年度のモニタリング結果について報告がありました。

○ 今年度の活動成果について

- ・ 今年度の活動を振り返りながら、次年度に向けた課題について話し合いました。

○ 次年度のモニタリング計画について

- ・ モニタリング結果を整理する手法について話し合いました。

○ 今後の進め方について

- ・ 工事の進め方について事務局から説明があり、整備を進めていく上での留意事項について意見交換がありました。

項目	意見
モニタリングの状況について	・ 例年だとシギチドリ類は10月中旬までいるが、今年は少ない状況にあり、早めに渡りが終わったものと考えられる ・ 工事の関係で右岸については数が少なくなっている ・ シギチドリは2～3日から1週間程度滞在していると思われる ・ 造成した池の周囲で狩猟が行われており、P-2の周辺でその跡が見られた ・ 草が急速に生育したため、草の陰を利用して狩猟を行ったものと考えられる ・ チュウヒについては3羽が定期的に観察されたが周辺では繁殖は見られなかった ・ 今年度は雪解けが早かったため、調査が遅れたが、浅い水域でエゾアカガエルの卵塊が確認された ・ ルリイトトンボ、アキアカネ、ノシメトンボが多い状況にあった ・ 環境が整っていないため、確認種が少ないのではないかと考えている ・ 湖沼の水位変化は全体的に秋頃に最低水位となり、その後水位が維持、または増加傾向にある ・ 全体を取りまとめてこの地区でどうなのか整理をすべき ・ 植生や昆虫、底生動物についても調査したほうが良い ・ 物理環境としては、残していきたい湖沼の調査について整理すべき ・ 水辺の国勢調査と比較したほうが良い ・ この調査が周辺の代表となっているのかどうかを評価したほうが良い ・ 石狩川のどこにあたるのかを地図で示したほうが良い

項目	意見
今年度の活動成果について	・ 各種活動を行うにあたっては実施団体を明らかにしたほうが良い ・ 当別地区での活動を一般から募集しても良いのではないかな ・ 活動に参加した人の意見もワークショップで共有できるようにしたほうが良い ・ 今年度の自然再生植樹は事務局と一体となって共催して実施した ・ 次年度の自然再生植樹はあいの里や当別の小学校の参加を予定している ・ 鳥類から見た場合、イベントとして調査を行うことがストレスになる ・ イベント実施にあたって、生物への影響を考慮したルールを決めたほうが良い ・ ルールについてはプランニングの段階で専門家がアドバイスしたほうが良い ・ 活動を行う上でガイドラインがあると有効ではないかな
次年度のモニタリング計画について	・ モニタリングの調査票に大きな地図を入れてはどうか ・ 調査した結果を再度書き直さないでデータ化できる方法が必要ではないかな ・ データベースの管理をどこでやるのかを決めておく必要があるのではないかな ・ GISの活用などデータベース化の手法を明らかにしたほうが良いのではないかな
維持管理について	・ 維持管理の必要性について十分判断したほうが良い ・ 必ず維持管理をするということではなく、様々な環境のバランスや生物管理と治水管理のバランスなどを考えていくことも重要 ・ 管理項目はあくまで参考であり、経緯を見ながら判断することが必要
利活用について	・ 鳥に対して脅威にならない距離を考えておく必要がある ・ 調査用の道路は必要だが、逆に心ない者の利用を助長するため、配慮が必要と考えられる ・ 看板は実行性が低いからやらざるを得ない ・ 学校単位などの多くの人利用する場合に対して留意が必要 ・ 韓国では何千人もいる中で20m程度の距離でヒシクイが見られた ・ 知床では独自のルールを作って広めている最中である ・ 自治体で銃猟規制に向けてどうしたらよいか検討してほしい ・ 事業の必要性を周知して保全に向けた活動をしていってはどうかな ・ 利用時の人数規制などのルールも考えられるのではないかな ・ ワークショップではルールを守れても一般の人に対して効力持たせるために検討が必要である ・ どこまでの管理が現実的に可能かどうかを事務局で提示してほしい ・ 時期と場所のルールづくりを次年度のテーマとしていくことが必要ではないかな
今後の進め方について	・ 道路の全体像がわかりにくいので、車利用と徒歩利用の視点で、利用可能な箇所を全体像として整理したほうが良い ・ 今後、誰が何を実施していくのが重要。今後事業を進めていく上で、自治体の方々にも積極的に事務局として参加していただきたい

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第9回の骨子

平成 21 年 10 月 7 日（水）、委員 13 名、アドバイザー 1 名参加の下で第 9 回当別地区自然再生ワークショップが開催されました。

■ 日 時 ： 平成 21 年 10 月 7 日（水） 午前 10 時 00 分～午後 12 時 00 分

■ 場 所 ： ホテル札幌ガーデンパレス 4 階 平安

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 名簿
- ・ 席次
- ・ 第 9 回当別地区自然再生ワークショップ 説明資料
- ・ えべつ農産物直売所・貸し農園MAP（委員提供資料）

■ 議事の内容

石狩川下流当別地区の自然再生を地域連携で進めるための、意見交換が行われました。

- 自然再生の実施予定について
 - ・ 今年度の自然再生の実施予定について報告がありました。
- モニタリングの状況について
 - ・ 地域連携で進めた今年度のモニタリング状況について報告がありました。
- 今年度の活動状況について
 - ・ 今年度実施された「高校生による水質調査（当別エコロジカルコミュニティ）」、「植樹活動（茨戸川環境市民フォーラム）」、「森林ボランティア」の活動状況について報告がありました。
- 当面の課題と対応策について
 - ・ 計画地の整備が進むに従って、いくつかの問題や課題が顕在化しており、これまでの得られた情報や意見の報告とそれらの問題や課題の対策案について事務局から説明があり、対策案について意見交換しました。
- 自然再生事業に関する情報共有について
 - ・ 情報共有・発信の考え方、情報共有に係る留意点、情報共有手法案について事務局から説明があり、これらについて意見交換しました。

項 目	意 見
モニタリングの状況について	・ 降雨の量が多いため湖沼の水位が高いということだが、全体としてそうなのだろうか。 ・ 地下水からの涵養（湧水）が考えられる。 ・ 今後、湖沼の連続性についても注目してはどうか。 ・ モニタリング調査成果の集約（様式の統一化）をはかるべきである。 ・ 今後聞き取り等を行い、維持管理を含め 3 月までにはまとめたい。 ・ P3 湖沼の上層水温と下層水温が他の湖沼と比べて同じくらいなのはなぜか。 ・ 現時点でははっきりとしたことは言えないが、P3 付近は風が強く、上層と下層が反転していることも考えられる。
今年度の活動状況について	・ 全道各地の高校生が集まって、北海道の環境を考える合宿を開催し、水質調査を実施したが、次年度も交流できればよいと考えている。 ・ 自然が再生するプロセスを見ていくことが大きな学びになるのではないかと考えている。 ・ 今年度から当別地区での自然再生植樹を開始したが、継続して取り組んでいきたい。 ・ 子供が石狩川という大きな川に触れる機会にもなればよいと考えている。 ・ これまで森林ボランティア活動に取り組んできている。 ・ 当別地区の自然再生が早期に実現することを期待しており、地元として役に立ちたい。

項 目	意 見
当面の課題と対策について	(利用についての問題) ・ 我々の活動自体がバッティングしていることが問題である。実際にチュウヒが繁殖している時に近傍で調査を実施している。特に猛禽類の繁殖時期には影響が懸念される。勿論、調査の必要性も理解している。 ・ 銃獺も減っているのではないか。本事業のPR効果が出てきたのでは。昨年は10月1日以降湖沼にカモがよっていなかったが、今年は10月1日以降も湖沼にカモがよってきている。 ・ 最終的に再生した自然を守るのか、住民を楽しませるのかをはっきりさせる必要があるのではないか。 ・ 保全と利用の両方と考えるべきである。 (看板) ・ 誤解を招く表現は避けるべきである。 ・ 規制の看板ばかりでなく、PRや案内看板についても考えるべきである。 (ゲート) ・ 基本は車の進入は禁止で良いのでは。 ・ 鳥類にとっては、散策など人の姿を見せるような行為が最悪である。調査を行う人には許可することも必要と考えられる。 ・ ゲートは鍵あり、鍵なしどちらを考えているのか。 ・ 鍵ありを考えている。 ・ 計画地の利用がすべて自由ということには無理があるのではないか。 ・ まずは看板設置とゲートバーの設置のみで利用上の問題が発生しないかどうか様子を見ることで良いのでは。 ・ 様子を見る段階は過ぎている。但し、ゲートの設置にあたってはどうしてゲートが必要なのかなどの説明が必要。 ・ 看板の設置とゲートの設置・施錠を試行してはどうか。 ・ 計画地の利用にあたっては堤内に駐車場が必要ではないか。堤防を生活道路として使用しているのであれば、そこに駐車すると支障が出る。 ・ 本日の委員の意見を取りまとめ、次回に説明したい。 (堤防除草について) ・ 今年も繁殖時期に除草が行われた。ノビタキ、オオジュリンに影響があったと考えられる。 ・ 植生を刈り込むことは草原の鳥にとってはマイナスではないし、除草を行わないと植生が変わるなど問題があるので、毎年除草は必要である。但し、繁殖期を避けるべきである。8月に入って刈るとか。 ・ 除草は堤防管理上必要である。除草した際の草は家畜の飼料として利用できるが、野鳥の繁殖時期を避けて8月以降に草刈りを行った場合には草が固くなり、飼料として使用できないのではないかと考えられる。 ・ 周辺地域でどの程度牧草が必要なのかなど、地区の情報をまとめて欲しい。 ・ 小規模で良いので、地域と直接話をしたほうが良い。 ・ 地域住民が参加した何らかのWSを考えてもよいのではないか。 ・ 地域住民が参加した住民参加型の話し合いを早急に関催することが必要ではないか。 ・ 砂川などにもタンチョウが来ており、近々、この水面を見つけてタンチョウが来るのではないか。 ・ 地域の活動と営農を結び付けることが必要と思う。
情報共有の考え方について	・ 情報共有を実施していく上で誰がそれを推進するのか主体が見えない。国（河川事務所）が出来るものではないため自治体の協力が必要と考えられる。 ・ 誰が責任を持って、誰が経営するのか、検討する必要がある。次回の議題としたい。

「石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ」第10回の骨子

平成22年3月3日（水）、委員14名、アドバイザー1名参加の下で第10回当別地区自然再生ワークショップが開催されました。

■ 日 時 ： 平成22年3月3日（水） 午後1時30分～4時00分

■ 場 所 ： ホテル札幌ガーデンパレス 2階 孔雀

■ ワークショップでの配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 名簿
- ・ 席次
- ・ 第10回当別地区自然再生ワークショップ 説明資料

■ 議事の内容

石狩川下流当別地区の自然再生を地域連携で進めるための、意見交換が行われました。トンボ調査を実施している旭丘高等学校生物部の皆さんもゲストとして参加していただき、調査報告がありました。

- 自然再生の実施状況について
 - ・ 今年度の自然再生の実施状況について報告がありました。
- モニタリングの状況について
 - ・ 地域連携で進めた今年度のモニタリング状況について報告がありました。
- 当面の対応策について
 - ・ これまでの得られた情報や意見の報告とそれらの問題や課題の対策案について事務局から説明があり、対応策案について意見交換しました。
- 地域連携について
 - ・ 地域連携の項目、情報共有手法案について事務局から説明があり、意見交換しました。

項 目	意 見
モニタリングの状況について	・ 草原性鳥類の繁殖はかなり確実。 ・ コハクチョウは新たに掘った右岸側の池で渡りの時期の立ち寄り場所としては良い場所なのではないか。 ・ 銃猟自粛区域にはなり、10月の中過ぎには水鳥が戻ってきているという観察もあったことから、非常に良い場所になりつつあるのではないかと。しかし、薬莢や入った跡が散見された。 ・ 石狩川大橋の近くでヒキガエルの確認があり、広範囲に増えると生態系に少し影響が出るかもしれない。 ・ 当別川右岸のP-3でゲンゴロウを捕獲した。幼虫も捕獲できたのでそこで産卵・繁殖していると思われる。P-8についても生息の可能性が考えられる。 ・ 幼虫が生息していく環境を確保する必要があり、ワンド箇所はカワヤツメに対して重要なウエートを占めていく可能性がある。 ・ 河岸の環境については、川に砂州を運ばせて、その中で出来上がっていく地形が生物にとって非常に大事な地形になる。 ・ エゾヤチネズミの巣穴、キタキツネの痕跡、ミンクが観察されるとともに、近傍ではエゾシカも確認している。 ・ ショウドウツバメの巣穴を補食しようとした跡が結構ある。

項 目	意 見
当面の対応策について 当面の対応策について	●堤防の草刈りについて ・ 当座は営巣時期を考慮して、草刈り時期をずらすということで対応し、ゆくゆくは部分的に草むらを残す形で草刈りを実施しつつ鳥類と共存できるというような形が良いと思う。繁殖が終わった時期になったら残したところも草地として維持するためには全部刈る必要がある。 ・ 草むらを残すと巣を明示することになり、カメラマンなどを引っ張ってくるだけの話になるのではないかな。 ・ あるエリアは刈らないというところを作って、営巣箇所を確保する方が良いかも知れない。 ・ 堤防管理上、洪水前に草刈りを行い、点検をしなければ安全は保てないのではないかな。 ・ 人為的な管理によって草原の多様性が維持できているということもある。 ・ 全ての堤防を自然に戻せという話ではなく、自然再生事業を行っている前で草刈り機に鳥が巻き込まれ、刈られた後で死んでいるヒナが捕食される状況が問題ではないかな。 ・ 自然再生事業地に限れば環境を重視し、その代りに巡視や水防体制の強化で8月下旬まで草刈りを待つことが出来るのではないかと考えられる。 ・ どこに繁殖しているかを鳥類についての活動されている方が教えていただければその場所を刈り残すことが出来る。 ●看板、通路について ・ 試験的に事業を行っているということを明示したほうが、誤解が生じないのではないかな。 ・ 生き物に対してのプレッシャーを考慮しながら、同時に自然を楽しむため、幅の狭い通路を作るのか、あるいは全然通路のない状態で維持するのかということを考えてはどうか。 ・ 出来れば各湖沼について1ヶ所、2ヶ所でも人がひとり歩けるような道ができないかな。 ・ 魚や昆虫を捕ってはいけないとすると子供の教育の場として活用しにくい。 ・ 看板を作る際に合流点のところだけを特定するような名前を用いてはどうか。
地域連携について	●情報提供のあり方について ・ どこまで情報を出すかルールは決めておく必要があるのではないかな。 ・ 今はそのインターネットで情報がものすごく早く伝わる時代であり、当別に行けばいっぱいいるという情報が出てしまうと乱獲されかねない。 ・ 貴重種については注意深く考える必要がある。 ・ 基本的に普通の種がどのくらいいるかということだけの情報に留めてはどうか。 ・ 活動スケジュールなどの情報を共有し連携できるようにして行ってはどうか。 ・ 二次的な発信というのはどうしても広がっていくので、現地での個別の対応が出来ると良いのではないかな。

項 目	意 見
今後の提案事項	●環境教育 ・ 自然を守らないと駄目だというふうに思っている子供たちがほとんどだが、自然に関心はなく、自然の知識がないのが現状であり、それを伝えるため当別地区には人を戻したい。 ・ 作るというところから管理という段階に入っていくときに、ネイチャーセンターのような施設を作って管理と利用とうまく橋渡しできるようにする必要があるのではないか。 ・ 札幌圏を控えた素晴らしい環境教育の場所であり、ポテンシャルとしては素晴らしいところなので、さまざまな活動の中から学ぶことがたくさんあるところだと思う。 ●モニタリング ・ 植物のモニタリングを加えてはどうか。 ・ 河川水辺の国勢調査の植生図を活用して変遷を見ていってはどうか。 ・ 生態系が変わっていく段階で、その推移を見ていき、攪乱というのがどれだけ大事なのかということを発信していく必要があるのではないか。 ・ モニタリング結果をデータベース化し、自由にアクセス出来るという形とれないか。 ・ 全部をその誰でも見られるようにするというのは、極めて危険な面もあるのではないか。 ●維持管理 ・ 自然再生地であり、目指す方向によっては、高水敷の草本類管理なども考える必要があるのではないか。 ・ ワンドに漂着するゴミなどの清掃活動も考えていく必要があるのではないか。 ・ 管理を行政に頼るのではなく、幸い札幌という大人口を抱えていることを活用して、ボランティア組織で行ったり、参加者を束ねていくことなどが今後必要になってくるのではないか。 ・ 当別地区で行ったことは、流域全体に影響することから、今後の管理の話などの方策も考えておいた方が良いのではないか。 ●活動支援 ・ ここにどのくらい人が来ることを想定するのかによって、駐車帯やトイレをどう配置していくかを考えなければいけないのではないか。 ・ トイレを設置することができないか。 ・ 近づきやすいような施設整備を行う必要があるのではないか。 ●事業 ・ 自然再生事業の当初の目的に照らし合わせて、動植物だけでなく、環境の評価を行うべきではないか。 ・ 魚も植物も鳥も、川の攪乱が必要であり、攪乱が年に数回起きるような河道計画を持つべきではないか。